

石川の河川敷の草地を歩いていると...

足元から大きなバッタが飛び立ちました！

冬の暖かな日や早春のこの時期、大型のバッタを見て驚かれる方もおられますが、「トノサマバッタ」に似た茶褐色のこの種、名前は「ツチイナゴ」といいます。

日本に生息しているバッタの仲間は、「卵」で越冬する種類がほとんどですが、この「ツチイナゴ」はライフサイクルが半年くらいずれており、成虫で越冬する珍しい種なのです。

10月頃から現れはじめる成虫の大きさは、雄で5cmほど、雌で6cmほどになります。

間もなく「冬」を迎えると、草原の枯草の下などで越冬するのですが、暖かな日には人の気配を察して草むらから飛び出してくる姿を見ることがあります。

春になると再び活発に活動し、交尾・産卵のあと、6月頃までにはその生涯を終えるようです。

そして...

他のバッタ類が成虫として活動している「夏場」は、この種はまだ「幼虫」なのですが、驚くことにその「体色」が成虫とはまったく異なっているのです！

全身「茶褐色」の成虫に対して、幼虫は「鮮やかな黄緑色」なのです。

(まれに黄褐色の幼虫もいますが...)

つまり、この「ツチイナゴ」、草木に緑が多い「幼虫期」には黄緑色、枯草の多い越冬時の「成虫期」には茶褐色に姿を変えろという、見事な**保護色**で身を守っているのですね。

そして、成虫の茶褐色が「土」の色なので「土(ツチ)イナゴ」と名付けられたのでしょう。

ちなみに、幼虫と成虫で体色は異なるのですが、「**涙目**」であるところは同じですね。

写真 : 河川敷の草地から飛び出してきた成虫

写真 : モズに「はやにえ」にされた成虫(2月に撮影)

生きものの少ない冬季、モズには格好の獲物になるのでしょうね。

写真 : 交尾するペア(5月末に撮影)

写真 : 幼虫(7月に撮影)

写真 : 幼虫(8月に撮影)

写真 : 幼虫(9月に撮影)











